

## 紙と電子書籍における読みの違いの検証 - 想像力に着目して -

岩瀬 梓

これまでに行われている紙と電子書籍の比較を行う実証的な研究の多くは読みやすさや身体的負担に着目したものであるが、一般的な読書の主な対象となる娯楽の読み、即ち物語文の読みにおいて重要な要素である想像力、つまり既有知識の活性化のされ方に着目した研究は行われていない。そこで本研究では、高解像度のタブレット端末である iPad(Apple 社)と紙の書籍を用いて実験を行い、読みやすさなどの従来から比較を行われてきた要素に加えて想像力に着目して読者の反応の比較検討を行った。

読みやすさの主観評価では、集中しやすさと身体的負担についてどちらの媒体も同程度の評価を得ているのに対し、ページのめくりやすさでは紙が、文字の鮮明さでは iPad が優位であるとの傾向が見られた。特に文字の鮮明さについては、より電子媒体になれていると自覚している被験者ほど iPad を評価するという関連性が認められた。読書速度についても媒体の差は認められず、既往研究で指摘されている通り、そもそもの物理的特性のような媒体の根幹的な特性に左右される点以外では紙も iPad も同程度の読みやすさを有していると考えられる。しかし、両媒体への慣れを主観評価で問う調査紙への回答は、電子媒体での読書ははまだ紙への読書ほど親しみのないものであることがわかるものとなった。ただし、スマートフォンに慣れているという自覚を持っている被験者は 8 割、タブレット端末については 5 割弱と、画面が大部分を占めるユーザーインターフェースを有した手持ちの電子端末自体への親しみを抱いている人の割合は低くないことがうかがえた。

想像力を議論の対象とするにあたっては、媒体間での想像力を比較するものが多くみられるテレビに関する既往研究に倣い、両媒体で提示した物語の続きを作話させる方法を用いた。作話結果の分析の結果、作話量には媒体間の差が見られなかったものの、iPad での読みに伴う作話の場合に読者によって創作される登場人物数が有意に増加することが明らかになった。よって、iPad は全体的な視点から、紙は少数に絞った分析的な視点からというように描写のされ方が異なり、想像力の働き方にも差があると考えられる。これは表示に用いられるのが反射光であるか透過光であるかという違いによって脳の反応が異なるという既往研究と整合性がある。本実験の結果から脳の反応について直接的に言及することは難しいが、感性語対の評定によって得られた読後感の得点から、感情および認知の差は作話、つまり想像の傾向と関連しており、さらにそれが媒体によって影響されているという可能性も示唆された。

本研究では紙と iPad のみを比較しているため、反射型ディスプレイの端末でも同様の実験を行い、物理的なページの感覚など媒体の表示に用いる光の種類以外の要因も読者の反応に影響するのかということを検討することが今後の課題として挙げられる。

(指導教員 池内 淳)